

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.101

2009年10月21日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 パクティアの桑の実採り (画・甲斐大策)

用水路に「開通」はあっても「完成」はありません

中村 哲

共に働いたアフガンの仲間たち

松永貴明

ワーカーOB報告⑧米軍の強硬な住民懐柔策

紺野道寛

過去 30 年の内戦がわが国のあらゆるものを破壊した

ジア・ウル・ラフマン

伝統の基盤であるモスク・マドラサの建設に感謝

ヌール・ザマーン

皆さんの力を必要としています

ジア・ウル・ラフマン／ヌール・ザマーン

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

用水路に「開通」はあっても

「完成」はありません

——突如襲う集中豪雨、自然との激闘、里人との軋轢あつれき

ペシャワール会現地代表・PMS（ペシャワール会医療サービス）病院総院長 中村 哲

記録的な集中豪雨、用水路を襲う

みなさん、お元気ですか。去る八月三日の「用水路開通」の朗報を送った後、八月中旬に一時帰国し、九月二十八日に現地に戻りました。この間、日本も大きな政権交代があり、「アフガン復興」が大きく取り上げられていました。しかし、議論に関わるいとまもなく、大急ぎで戻りました。

東部アフガニスタンでは、五月以来まる三ヶ月、雨が降りませんでした。突然、広範な地域が集中豪雨に見舞われました。記録的な豪雨は、八月二十九日、九月十五日、九月二十四日と三派に及びました。このため、新設したガンベリ沙漠横断水路は砂で埋まり、あちこちで溢水いっすい、土手崩壊の危険にさらされたのです。

地図を見てください。私たちの働いているニングラハル州は、南にそびえるスピンガル

山脈と北にあるケシュマンド山脈（いずれも三千メートル以上）に挟まれた山麓にあります。ここに東からカブル河の本流、北からクナル河が流れ込んで合流します。この

山麓地帯は、かつて豊かな有数の穀倉地帯を成していました。でも、近年急速に沙漠化し、見る影もありません。今回、普段ならごく狭い地域に集中する豪雨が、この全域を襲いました。沙漠化した地域に雨が降るのはよいと思われましようが、そうではありません。保水力を失った土地に突如豪雨が襲うと、水は勢いを増し、洪水となって人家を流し、畑を土砂で埋め潰してしまします。

治水の大切さと現実

私たちの主な活動は、この両山麓地帯での飲料水源の確保、大河川からの取水による農地の拡大です。その最大の仕事はマルワリード用水路です。再々述べたように、同用水路



用水路全線開通で喜び合う作業員たち

はクナル河から岩盤を這うように伸び、ガンベリ沙漠まで二四・三キロメートル、その後自然土石流路を下って再び本流に戻ります。従って、用水路は全線にわたって谷あり崖あり、難工事でありました。中でも、集中豪雨には泣かれます。日本でも八ッ場・川辺川ダムをめぐって治水のあり方が問題になっていましたが、こども例外ではありません。ただ、違うのは、予算が極端に少ないこと、行政がほとんど関与しないことです。急務で



シギ村の農民を動員して、湿害対策のため、必死の排水路整備が続く

ある農業用水の確保は、貧しい農民自身の手によらざるを得ないのが実情です。私たちPMS（ペシャワール会医療サービス）が敢えてこの問題に手をつけたのは、このためです。誰も本気でやれないのです。やりたくとも、日本政府の水利事業の予算を見るだけで絶望的になります。

自然との同居の知恵

さて、用水路に「開通」はあっても、「完

関連地図



成」はありません。それは絶えず維持補修を必要とするからです。おまけに、気まぐれに襲う自然災害は予測不可能で、被害を受けてから初めて抜本的な大改修を行うことが少なくありません。これを繰り返しながら六年半以上、年々水路は安定してきました。でも限られた予算では、自ずと採用される方法が決まってきます。具体的には、①鉄砲水の緩流化、②遊水地の設置、③速やかな排水の工夫

です。水は堰き止めるのでなく、穏やかに流れてもらうのです。

①は、岩石などの障害物と共に、幾重にも植林して、保水力を増し、流速を落とすことです。植樹チームを強化して大がかりな林の造成に取りかかっています。②は、洪水路を完全に閉塞せず、できる限り人工的な護岸をせず、住民に居住地を作らせないことです。また、流路に大きな溜池を置けば、被害を著

しく減らせます。③は、自然の河にもどる流路を大きく確保することです。

難しい話ではありません。少し自然に興味のある方なら、何でもない山間部の村落を想像されるでしょう。日本人の先祖たちが営々と森を築き、段々畑というダムを兼ねる水田を拓き、溜池を置いて渇水に備え、洪水の来る所には住まず、慎ましく水の恵みを享受した、そのことなのです。

荒ぶる川の流れには、天を祀って無事を祈りました。もちろん、祈るだけで厄災を免れるわけではありませんが、そこには長い時を経て得た自然との同居の知恵、その恩恵への感謝がありました。

水をめぐる抗争と対策

とはいえ、小生の帰還と共に、現地では再び自然との激闘が始まりました。これに里人たちの軋轢^{あつれき}が加わります。村々の利害の調整も大きな仕事です。人は業なもので、つい身内の利害で固まってしまう。水不足のときは水争い、水が増えれば文字通りの我田引水、今度は湿害の発生です。

PMS（ペシャワール会医療サービス）では地域全体の取水量の調整、高低差を考慮した各分水路の見直し、排水路の造成を大規模に実施しています。独立不羈^{ふき}の農民たちは、いかなる権力にもなびきませんが、生命線である水を律する私たちには協力的です。この

ために、PMSを「陰の領主」という向きもあります。水がいかに人々の和を左右するかの証左でもあります。

自然と人、人と人の間で

「自立定着村」の方は着々と耕地の整備が進んでいます。先ずは比較的平らな百ヘクタールほどを開墾し、今年十一月の小麦の作付を実現します。これには実は切実な事情があります。食糧価格の高騰が職員たちを苦しめていて、いくら給与を上げても、追いつきません。昨年は世界的な小麦不足のあおりで危機的な状態でしたが、アフガニスタンでは依然として絶対的な食糧不足が続いています。給与の殆んどが食糧に消えてしまいます。そこで、来年度からはPMS自身の自給自足を目指し、食糧を現物給付する計画を立てています。アフガン人職員全てが農民だと言ってよく、いざとなれば医療職員でさえ耕作を厭いません。計画が実現すれば、一千名を擁する村となり、単に水路の保全だけではなく、自活・自衛できるようになります。

このため開拓農家の住宅整備も進んでおり、皆の話では小生が「初代村長」になるのだそうです。悪い気はしません。日本で見放されたあかつきには、ここを拠点に平和で豊かな世界を夢見ることが出来ます。

しかし、人里も一筋縄ではいきません。私たちの沙漠横断水路は隣のラグマン州とニン



護岸に植樹した木々が生長し、緑のラインがK池を囲む

グラハル州との境界に当たります。今年四月、ラグマン州山岳地帯の住民が大挙して押しかけ、既に定着している住民たちと水路をはさんで対峙、銃口を向けあって一触即発の事態となりました。地方軍閥内部の抗争が絡んでいるようでしたが、ラグマン州でも早魃^{そうてつ}が深刻らしく、開通した水路の噂を聞きつけてやってきたのです。

PMSとしても、折角の開拓地を失うわけ



ガンベリ沙漠の開拓団居住区。各戸は約227坪(750㎡)。六戸ごとに2本の井戸。集落の長さは約1kmの長い村。手のかかる礎石は終わり、壁の造成が始まった

にはいきません。外交策を講じて積極的に仲介しました。沙漠の中にある丘を公共地とし、「アマン・ゴンデイ(平和の丘)」と命名、開拓団の居住地を中立地帯にすることで落ち着きました。

ところが、今度は米軍PRT(地方復興チーム)との衝突がありました。水量調節の要である沈砂池を養魚池に転用するというのです。そうすると、水量調節が不可能になります。

す。PMSは即座に拒否し、代わりの池を勧めました。しかし、かなり強引な態度だったのです。結局、住民の圧力を背景に退けましたが、一時は「取りたいなら力づくで取ればよい。諸君の強大な武力に抗し得る者はいないではないか。但し、混乱の責任は君らに取ってもらおう」と、蛇籠のバリケードを高く築いて対決、緊迫しました。このいきさつで分かったのは、PRTに配属される将校が殆んど実情を知らされぬまま、「復興だからいい」と信じていることでした。人々はそうでなく、軍事活動の一つと見なしています。このことは興味があるので、また別の折に紹介しましょう。

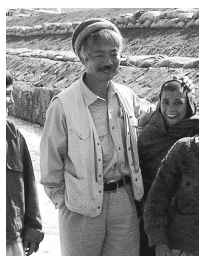
昨年、私たちの仲間の伊藤和也くんを失いました。しかし、敢えて報告の中では触れないことにします。人の言葉はあまりに貧しく、美談と対の底意地の悪い論評も同根です。彼をそのままに受け入れない奇妙な風潮が、彼の生死を侮辱し、現実から遊離するように思われるからです。どんな人の生命も尊く、かけがえのないものです。平和を観念に閉じ込めてはなりません。

平和を語るのはたやすいけれど、実現するには戦争以上に忍耐と努力が必要です。現場は血まみれ汗まみれ。人の世界は塵まみれ。それでも示される一つの道があります。それに忠実な限り、大きくは過たないでしょう。

会員のみなさんの辛抱強いお支えに心から感謝します。

平成二十一年十月二日

ジャララバードにて



中村 哲(つなむら てる) 九州大学医学部卒。専門＝神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保(井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千五百ヶ所以上)事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約七万人(二〇〇八年度)。

ワーカー通信

共に働いた

アフガンの仲間たち

——称えられない人々のこと

現地連絡チーム・ワーカー 松永貴明

◎ヤル・モハマド…四〇歳代くらい。水路で蛇籠造成チームを率いる現場監督。水路の恩恵を受けられないブディアライ村出身。図体が大いにくせに気が小さい。それでも作業でのリーダーシップは抜群で、蛇籠造成のスピードが早い。ときどき、高校生くらいの年の息子を彼のチームに日雇いとして紛れ込ませていることがある。理由を訊くと、小遣いをせびられたからとのこと。自分の息子を雇い、小遣い(日当?)をあげるちゃっかりした父親。

◎アブドウル・ラフマン…通称ラフマン・ババ(ラフマンじいさん)。五〇歳代。早魃のひどいソルフロッドは郡出身。いつも厳しい目つきでダンプロトラックの誘導などを行なう現場監督。井戸事業時代はウォーターポンプ技師。一見怖そうなおじさんだが、ものすごくまじめに仕事に臨んでくれる。病気の奥

さんの薬代を稼ぐためもあり、休日出勤などの残業も厭わず引き受けてくれる頼もしいスタッフ。水路現場の最難関といわれた岩盤周りの仕事を進藤さんと共に取り組んでくれた。

◎グラム・サヒ…通称タラブダール・サーブ。六〇歳くらいで立派な白髭のおじいさん。PMSスタッフの長老格。土手や分水路などの造成チームを率いる。演説好きで、水路の部分通水や取水口完成などのセレモニーのときには、毎回スピーチをお願いしている。また、愛煙家でもあり、中村先生が日本から持ってくるタバコの「Peace」をもらうと、決まって「アフガニスタンにはこれが必要なんだよ。それは日本から来るんだよ」と「Peace」(「平和」)の箱を指さしながら熱弁する。

◎ハビブラ…通称ムッラー・ハビブ。四〇歳代。ソルフロッド郡出身。もともとジャララバード事務所で車両修理担当の事務職員だったが、修理物品買い出しでの不正を疑われ、水路現場に左遷。事務所にいたころはいつもピリピリしていたのが、もともと野外向きの性格なのか水路現場では水を得た魚のようにのびのびと仕事をこなす。はじめは重機誘導を担当し、現在分水路造成チームを率いる現



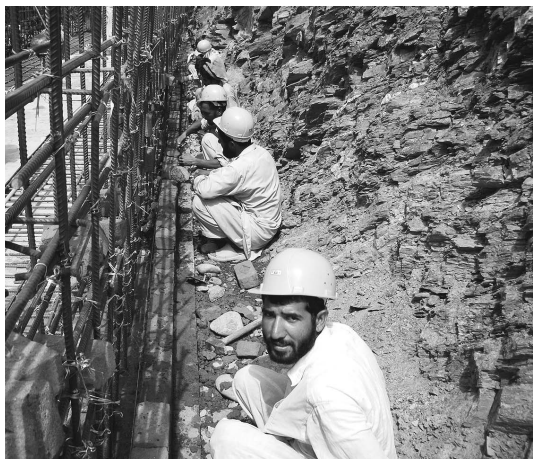
アルサラ・ハーン(中央の大きい髭)と子供たち。
右から5人目が松永ワーカー

場監督。彼の事務所勤務時代、私も事務所では会計を担当していて、不正の件などもあり私とは犬猿の仲だったという過去がある。今は仲いいです。

◎アルサラ・ハーン…四〇歳代後半。ダラエヌール診療所のあるカライシャヒ村出身。もともと発破チームで働いていたが、発破作業が禁止となった現在は水路沿いの植樹チームを率いる現場監督。ちよつととぼけたおっさんで、本人曰く、ものを数えるのが苦手で、

数えるものが多くなると頭が痛くなるとか。それでも苗木の数を数えるという仕事を頑張っている。おもに十数キロにわたる水路沿いの担当エリアをモーターバイクで駆けまわり、柳や桑の木などへの水やりなどの指導を行っている。

◎**シェル・ワリ**…二〇歳代前半。用水路の恩恵を受けることのできるシギ村出身。二児のパパ。もともとは日雇い作業員で、まじめな仕事ぶりを買われ重機担当の現場監督へ。二〇〇九年一月末、バックしてきたダンプトラックに轢かれ重傷を負った。復帰が危ぶまれたが、なんとか回復し、現在再び水路現場で働いているとのこと。



日雇い作業員時代のシェル・ワリ

◎**通称ベラ**（聾啞の意）…本名不明。四〇歳くらい。身体が小さく、耳も聞こえないため周囲の人たちからバカにされることがしばしば。しかし、それを克服するにはあまりあるくらいの働きっぷりで、植樹の日雇い作業員から現場監督に昇格。激しい身振り手振りでコミュニケーションをとる。喜びを全身で表現したりするので、見ていて楽しく、ある意味ムードメーカーでもある。

◎**サディク**…四〇歳代後半くらい。水路沿いにあるカンレイ村出身。PMSのスタッフではなく、地元の左官の親方で、日当を払って仕事をしてもらっている。以前、日本人ワーカーの鈴木さんと鬼木さんと組んでいたことも。職人気質で頑固な人かと思いきや、意外とお茶目なところのあるおじさん。マドラスやモスクの建設を担当。アーチ状の窓枠な



用水路の左官工事をするサディク

どで腕を発揮した。

◎**マティウラ**…ブディアライ村出身。ダンプトラックドライバー。立派なカイゼル髭が特徴の、めちやくちや陽気で冗談好きなおっさん。実は奥さんが二人に子供が十数人という大家族の大黒柱。ときどき第一夫人と第二夫人の間に立たされ困るとか。

◎**パチャ・グル**…四〇歳代前半。早魃が特にひどいアチン郡出身。以前、パキスタンとの国境で税関職員として働いていた経験を持つ。水路現場のスタッフが寝泊りをしたり、セメントなど資材を一時的に保管する現場基地事務所の責任者。私が水路事業に異動になったとき、この現場基地事務所担当になったので、彼と組むことに。おっとりとした性格なのに、なんとなく仕事をこなしている不思議な



ダンプトラックを降りて作業を見学するマティウラ

おじさん。私が現地を離れる際、現場基地に対する憂いが比較的少なかったのは彼の存在があったから。

◎ハニフラ・三〇歳代後半。ソルフロッド郡出身。ジャララバード事務所会計担当。井戸事業の現場監督であったが、正直さを買われ会計担当になるも、一時的にPMSを離れたことのある出戻りスタッフ。気弱な性格ではあるが、意外としつかり者で、日本人ワーカーがいなくなっても、現地事業の会計報告が作成できるのは彼のおかげ。ただ、電話で人と話すときやたらと声が大きくなるのはどうにかならんものかと。

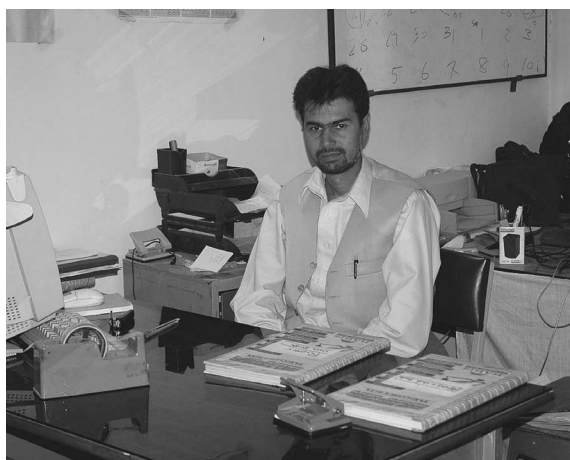


現場で中村医師と打ち合わせをするパチャ・グル（右端）

◎モハマド・ジャン・通称ママ・ジャン。五〇歳代後半。ジャララバード日本人宿舎のハウスキーパー。日本人ワーカーたちにとっては寮父的存在。とにかく頑固な性格。しかし、その頑固さが宿舎を任せるにあたって安心感を与えてくれる。現在中村先生の食事の世話などもしていて、毎晩山盛りの生野菜サラダを準備してくれる。最近では日本から持ってきた乾燥ワカメの水でもどし方を覚え、サラダに添えてくれる。ただ、海のないアフガニスタンにはワカメなどもちろんなく、海を見たことのないママ・ジャンがワカメとは一体なんなのか知るわけもない。

唐突でしたが、PMSの事業に関わってきたアフガン人のほんの一部の人たちです。特に私と関わりの多い人たちしか紹介できなかったのですが、他にもたくさんいます。アフガン人だけでなく、ペシャワール側で物品の調達に奔走してくれたパキスタン人スタッフの助けもありました。

せっかく八月に水路がガンベリ沙漠まで通水したのだから、そのことでも思ったことを書くように考えていました。しかし、現地に直接関わってきたものとして、彼ら現地人に助けられ、支えられたものとして、彼らのことを知ってほしかった。用水路開通のことは新聞やテレビなどで伝えられますが、こういう人



ジャララバード事務所・会計担当のハニフラ

たちがいたことはなかなか伝えられない。だから、せめて会報という場では、彼らのことを伝えたいと思いました。

私たちの仕事は私たちの一方的な想いだけでは成り立ちません。現地の人たちの手助けがなければここまで来れませんでした。

用水路二四・三キロ開通。その場に立ち会えなかったことは私としては正直くやしいですが、現地で働いていた彼らと同様素直に喜びたいです。しかし、まだまだ現地事業は終わりではありません。通水した用水路を活かすのも、不毛のガンベリ沙漠が緑で覆われるのも、これからです。

●ワーカーOB報告⑨

米軍の強硬な住民懐柔策

——あやうく住民の敵に

元・PMSワーカー 紺野道寛

診療所の日々

ご無沙汰しています。またこうやって会報を書かせて貰うことに、時の流れをしみじみと感じています。帰国して一年が高速に過ぎ去り、今は地元・東北で働いています。

私は、合計すると約四年と少し現地ワーカーとして御世話になりました。ジャララバードオフィス、ベシャワールの病院、ダラエヌールの診療所、そして先日水が通ったと伺った水路事業の植樹や測量と、色々な仕事にちよつとずつ関わらせて貰いました。

その中でも、ダラエヌール診療所で過ごした時間が、一番長く同時に一番印象に残っています。当時の診療所は、医師一名、看護師二名、検査技師一名、門番三名、受付一名の計八名ほどで仕事をしていました。受付係が私で、他はみなアフガン人（時にはパキスタン人）でした。また、さらに上流の「ダラエピーチ」「ダラエワマ」の二診療所がまだあった時期で、毎月一日にはパキスタンのベシ

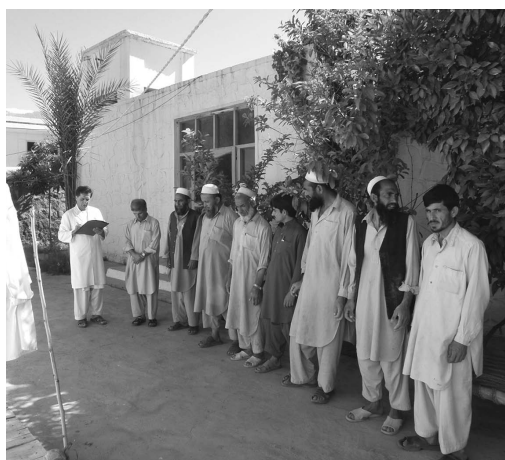
ヤワール病院から太つちよな薬局長が、交代チームを率いて、ダラエヌール診療所にやって来るのが日常でした。そう、その頃は各診療所では一カ月単位で職員が交代し、時にはベシャワールの病院に戻り医療のトレーニングをする体制でした。ひと月単位で、スタッフが入れ替わる為、あまり落ち着かなかったのを覚えています。

私の仕事は、受付業務のほかに、診療所の質の向上を目指すことでした。それまで一〇年以上も続いてきた診療所は、村の信頼は厚く改めて継続することのすごさ・大切さを感じましたが、同時に診療所はアフガン化している部分もありました。注射や点滴が必要な患者がいると、そのまま薬材を配ってしまったり、自分の病気の為に薬を薬局から持ち出したり、果ては急患が来ると、看護師が勝手に診察をして処方を書き、それを医師が患者を診ないでサインだけをして薬を配る……などと言う、素人目にもおかしいことが時たまありました。医療関係者でない私は、一つ一つ衛星電話や手紙で（当時、まだ携帯はありませんでした）ベシャワールの藤田さんに確認し、時には水路事業で忙しい中村先生の所に押し掛けて尋ねたりしました。しかし、細々としたことを口を酸っぱくして注意をしても、月が変わればまた新しいスタッフが来て逆戻り。でも、今になって思えば何年もそういった環境で働いてきた海千山千のア

フガン人が、英語も片言の私の言うことに従う、というほうが無理な話でした。

予期せぬ訪問者

そんな中、米軍のタリバーン搜索活動等が影響し、二〇〇五年一月山岳地帯のピーチとワマの診療所の継続が困難となりました。私は行ったことが無かったのですが、共に働くスタッフから、ほかに医療機関の殆どない地域にとつて、この二診療所は本場に必要な存在だった……と聞き、診療所の閉鎖には心が痛みました。人間にとつて、大切な家族が病気になった時、いつでも受け入れてくれる所があるというのは、実は非常に心強く、そして恵まれていることを知りました。



診療所を守る職員たちの朝礼風景

このように米軍の活動が活発化し、毎日空を轟音のヘリが行き交うようになった頃、ドラエヌールの診療所にも思わぬことが起こりました。予期せぬ訪問客でした。装甲車四台に囲まれて、診療所にやってきたのは元PM Sスタッフで会計係だったアフガン人S君と米軍らしい軍服の男たち。一緒に給料袋詰めをやったことのあるS君が、半袖にミリタリーズボンで腰にはコカコーラのペットボトルを下げ、「ハローマイフレンド」となれなれしく、握手をしながら戦闘に、ではなく先頭になって入ってきました。正直、米軍と懇意にしていると思われるのは、住民の誤解を生むため、一刻も早く彼らには立ち去って欲しかったのですが、S君はそんな私の心を読むこともなく、「いや、あのね。俺たち、ここで高い薬配ってやるからよろしくね」と言い出しました。今になってみれば、PRT（地方復興チーム）の活動で住民への怀柔政策の一環だったのですが、私たちは寝耳に水で、目が点となりました。

とりあえず、診療所の最高責任者は医師なので、

私…「ドクターサーブ。どうしましょ？」

医師…「ここは、日本の診療所なんだから、お前ら決めろ。（訪問者に向かって）だから、オレには分からない」と逃げの一手。

私…「グランモハマドじいさん（ドラエヌー

ル出身の看護師）、どうすつべ？」

じいさん…「米軍にはかなわねべ。取りあえず、配らせておくしかねんでねえが

い？」

しかし、診察もしないで薬を配るということと自体おかしいし、出来るだけ早く診療所内から出ていつてほしかったので、「基本的に、訪問者はペシャワールの基地病院にコンタクトを取って欲しい」と申し訳なさそうなふりをして頼んでみました。すると、訪問者はみなむつとし、特にS君が「はあ？ 何言ってるんだ。こっちは戦車と一緒に来てんだぞ。外国の高い薬、いくらすつと思ってるんだ」と引きません。中村先生の腹心で、交渉に強い看護師のサルフラーズさんは用水路の助っ人ではないませんでした。

結局、最後まで粘るS君をしり目に、軍医らしい人が諦めたようで、「いい。他の診療所さ行くべ」と出ていったのですが、診療所の外に出て驚きました。何百人もの村人が集まっていた。後から聞いたところ、「もし米軍を受け入れたら、住民は敵と見なしてたよ」とのこと、冷汗が流れました。実際、同じように米軍が薬を配った診療所が、地元住民から米軍の仲間と思われて襲撃されたと聞きました。この事件から、「すべきこと以上に、してはいけないことを知ることが大切」という中村先生の言葉が身にしました。

そのように、色々な事件ややりとり・出

会いがあった診療所での活動が、二〇〇九年の今も継続されていることが大変嬉しいです。日本から遠く離れた渓谷で、用水路のような大きな事業でなくとも、地道に住民の為に昼も夜も頑張っている元同僚たちにサラム（こんにちは）と言いたいです。勿論、酷暑の夏に用水路を完成させた用水路スタッフや住民にも。また、会員のみなさん・事務局のみなさん・自分を送り出してくれた家族や友人・中村先生を始めとする日本人ワーカー、本当にありがとうございます。今後も、自分に出来る形で、ペシャワール会を応援し、アフガンやパキスタンの人たちのことを考えていきたいと思えます。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願いいたします。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

過去三〇年の内戦が わが国のあらゆるものを破壊した

PMSジャララバード事務所総責任者・PMS副院長 ジア・ウル・ラフマン

私、ジア・ウル・ラフマンは一九九六年から二〇〇八年九月までパキスタンのPMS病院で勤務し、現在ではアフガニスタンのジャララバード事務所総責任者の任に就いております。今回は皆様に我々の活動を報告致します。同オフィスの運営は順調に進められており、下記の管理方式に従って事業を展開しています。

1 毎朝、始業一五分前に責任者会議で事業計画を協議、確認。

2 物品購入班は、現場から必要物資の購入依頼があった場合、まずバザールから見積を取り、質が良く価格の低い商品を選ぶ。こうすることで、同じ店舗との癒着を防止する。

3 車両の管理。職員が業務上車両を必要とする時は、使用許可券を発行し事務所出入り口に記録簿を置くことで、車両の不正使用を管理する。車両修理については、修理費削減の為現在PMSでは修理工四名を雇用しており、外注業者による修理を極力減らし、PMS管理下で修理を行う。

4 PMSでは職員に昼食を提供しており、食材についても購入班で管理し改善を図っている。これにより支出が低く抑えられるようになった。

5 政府への報告書を期日までに提出する為、文書管理を適切に行う。

6 渉外。政府その他の組織との関係を良好に維持するため、活動を定期的に知らせている。

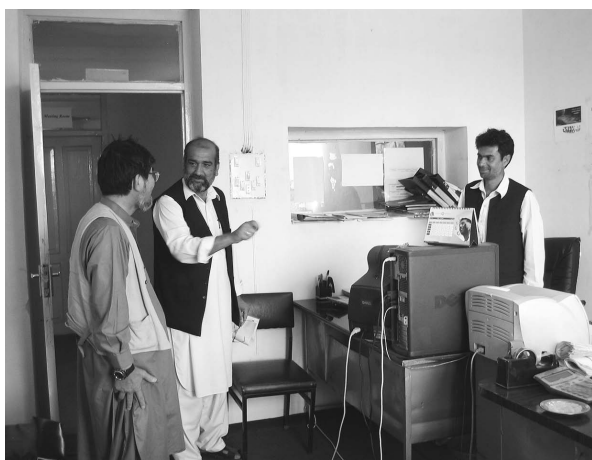
右記は中村医師の指揮のもと順調に運営されており、全職員の士気も向上している。

● ニングラハル州の活動について

A ダラエ・ヌール診療所・医師二名が一日当たり約一八〇名の患者を診察。患者は主に女性と子供。現在四名の結核患者を治療し、治療を無料で提供。またてんかん患者八〇名を治療し、これも治療を無料で提供している。ワクチン投与プログラムも実施しており、毎日九名以上の児童がワクチンを受けに来て

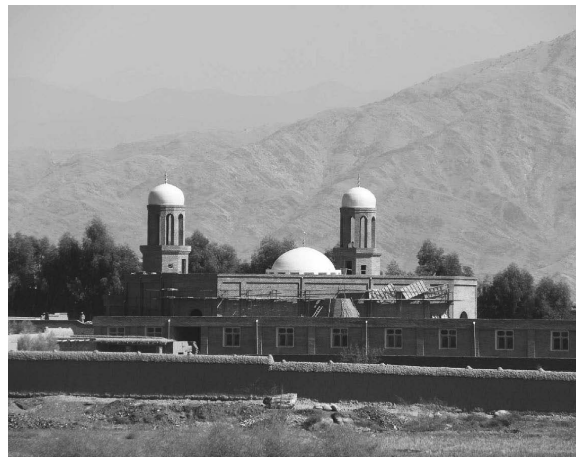
いる。なんらかの事故による負傷患者は週当たり八名。らい患者も数名、検診に訪れる。以前はアフガン人らい患者はベシャワールのPMS病院に来院していたが、最近治安悪化や、査証なしで国境を越えることが出来ないなどの問題を抱えている。このため、PMSではジャララバードに小規模の診療所を開設する計画を立案中。

B 井戸計画…同計画は井戸の維持管理が困難なため二〇〇八年一二月に終了した。現在ある約一六〇〇の井戸については、学校・モスク・地元の地域共同体に委譲して自主管理してもらうようにした。



ジャララバード事務所のジア先生 会計室にて（左から2人目がジア医師）

●灌漑計画



モスクとマドラサ（手前）。モスクのミナレットも完成した

- 1 マルワリード水路…二〇〇八年末までに全長二・四・三キロのうち約一九キロの主要部分を完成。二〇〇八年までの植樹本数は約二〇万本で、このなかにはガンベリの防砂用二・五キロ区間も含まれる。
- 2 シエイワ取水口の建設は二〇〇八年三月に完成し、シエイワ郡全域にわたって灌漑用水を供給している。
- 3 住民が灌漑用水が得られず苦労していたベスード地域において、ベスード上流域・下流域の取水口を修理した。
- 4 カマ上流域取水口建設。カマ上流域には

五村落があり、六年後には灌漑用水が涸れると推測されたため。また四〇村落が灌漑用水を取水しているカマ下流域の取水口も修理した。

5 農業計画については、治安問題によりダラエ・ヌールからガンベリに移動。食糧増産とともに貧しい住民、職員への援助を計画中。

6 マドラサ建設…教育省および地元住民の要請により、PMSでは七〇〇人収容のモスク（礼拝堂）と児童の教育（宗教教育も含む）のため一二教室を建設した。

これらは全て皆様のご寄付の賜物ではありますが、過去三〇年に及ぶ内戦がわが国のあらゆるものを破壊してしまったことをここで言及したいと思います。わが国民は非常に貧しく、全てを失いました。わが国の人々を代表して、このような窮状にある中、アフガン国民は皆様の人道的支援を必要としていることをお伝えします。困窮する人々が自立できるようにご支援下さい。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

銀細工師の冥婚

甲斐大策

（新連載 サファル・バハール！（良い旅を））

2

小柄で痩身のアリには重過ぎる荷である。街道脇の土手に背負った木箱ごと上半身を先せかけ遙か下方の宿場を見た。

七六年冬、共にデク結核を病むバーミヤン谷のタジク農民夫婦が五歳と三歳の息子を養子に出した。葉が降る中、トラックの荷台で羊たちの身を屈めた兄弟は、着替えるの包みを胸に泣きじやくりながら、谷の北七十里、ドウアブで商人宿を営む、同じくタジクの男のもとへやってきた。

十年後、旅の飾り職人が兄弟に銀細工の修業を勧め、ヘラトの親方へ紹介状を用意してくれた。血と痛みが信を支えるシアアの心に加えヘラトの職人たちは、うちに秘めた義侠心を共同体の柱としてきた。兄弟は、混迷を重ねる外界と無縁に、ものいわぬ輪や鉄床と共に暗い工房の片隅で炉の火と向き合う十年を過ごした。タリバン支配下のドウアブに戻った兄弟には、銀を銜う銅、ニッケル、亜鉛の合金を材料とする仕事しかなかった。

九八年、兄はバーミヤン在のハザラの娘と婚約貯えの全てを純銀に替えた。兄弟は、娶る娘を飾る銀細工づくりに没頭した。翌年早春、兄は装身具と支度金を携えバーミヤンへ向った。ガンガール近くの峻険な山道で何者かが兄を襲い、持物にとどまらず生命まで奪い去ったのだ。二頭の馬は残っていた。当時一帯に東部からきたらしいバイクの二人組による掠奪行為の噂がないわけではなかった。

アリは、借金で純銀を求め、秋の終りには、奪われた細工と同じ意匠、同じ数の装身具を作り終えた。兄の魂が全身に満ちた。アリは二頭の馬と共にバーミヤンへ向う。ネカーフエ・ジャーン（冥婚）である。逝った者の復活と人々を納得した。

七日後、全身を真紅の布でくるんだ花嫁を伴ないアリは、宿場から二キロ南シカリ川近くの天然の岩屋まで戻った。人目につかないよう花嫁をそこに残し、楽師たちと共に待つ養父への先触れを、と馬を駆った。岩屋に全速で戻ったアリの前には、衣類を剥がれ息絶えた花嫁が横たわっていた。今回も馬以外の全てが持ち去られていた。アリが花嫁の顔を眼にしたのは、この時が初めてであり、兄の眼で凝視めつづけた。

東部へ向うアリの旅の目的を養父も人々も深く理解、静かに見送った。

伝統の基盤である モスク・マドラサの建設に感謝

PMSジャラバード事務所総責任者補佐 ヌール・ザマーン

日本ペシャワール会会員の皆様へ

心より敬愛の念を込めて、アフガニスタンの人々のためにご寄付を下さったペシャワール会員ならびに日本の皆様に深くお礼を申し上げます。そして皆様がご家族とともにご健勝であられることを心よりお祈り申し上げます。

過去に日と同じくして自由になった日本とアフガニスタンですが*、その後、安定した状況下にある日本国は幸運です。一方、アフガニスタンは不幸にも他国による攻撃や深刻な旱魃に直面しているのが現状です。

*

それでは、ここでPMSの活動と私の役割についてご報告申し上げます。

私はPMSに二〇〇一年三月二十八日に、ダラエ・ヌール地区における活動を担当する為雇用され、二年間井戸事業と地域住民への飲料水供給を任されました。

その後、ドクター・サーブ中村よりダラエ・ヌール地区副主任に選ばれ、地区事務所では資材や燃料などを管理する一方、ブディアライの井

戸や灌漑用井戸の調整を行いました。そして二〇〇三年に今度は灌漑（水路建設）事業の責任者に任命されました。二〇〇三年五月一日には掘削が開始され、ドクター・サーブの指導のもと日本と地元アフガン人技術者達による共同作業が始まりました。

同事業は成果を生み、アフガニスタンの人々の生活に大いに役立っています。私は水路現場の責任者として約六年間働きました。現在はジャラバードの事務所では責任者補佐として働いています。職務は、水路や自立定着村等の建設に必要な機材・資材をジャラバードやケーブルで調達して工事現場に供給すること、地元住民や政府機関との間で良好な関係を構築することです。

●業務内容

- 1 物品購入班の設置。
- 2 購入班が入手した見積の検討
- 3 資材品質選定
- 4 資材価格検討



息子を抱くヌール・ザマーンさん

- 5 資材数量確認
 - 6 会計担当への出勤レポート提出
 - 7 半月ごとの燃料使用量チェック
 - 8 車両への給油
 - 9 職員及び警備員への業務指示
 - 10 レンタル業者などへの高額支出の支払い
 - 11 日本から届いた運営費の現地通貨への換金（アフガニ／ルピー）
 - 12 銀行関係手続き
 - 13 職員用食料調達
 - 14 アフガン政府への年次報告作成
 - 15 ペシャワール会事務局との連絡
- これらが私の業務内容であり、正直に誠実に業務を遂行しています。皆様からのご協力とご支援をお願いします。

●PMSの活動

アーベ・マルワリード水路は二〇キロ地点まで完成。(注：五月の記述)現在残りの部分を建設中で、工事は順調に進行しています。一日当たり七〇〇人前後の作業員が工事に従事しています。住民が建設作業で忙しいおかげで、この地域の治安は安定しています。また護岸用に沢山の樹木が植えられました。

●シェイワ取水口

二〇〇八年三月完成。シェイワ全域に安定した給水を行っています。

●ベスード地区にて二カ所の取水口修理

同地区の取水口はニングラハル州にとって大変重要です。住民は冬季になると川の水位が極

端に減少するため、水不足に苦しんでいました。

●カマ取水口

灌漑省の要請により、PMSは〇八年二月一日に取水堰及び水門を緊急着工しました。同取水口は〇八年一月には完全に干上がっていました。現在カマ全域に水を供給しています。

●マドラサ・モスク建設

マドラサはアフガン人にとって生活の基盤であり伝統の一部でもあります。誰もマドラサ建設が出来る状態にはありませんでした。我々は日本の方々の多大なる好意によってマドラサが建設されたことを生涯忘れないでしょう。マドラサの建設は他国に破壊されたこの国を救い、ひいては将来多くのアフガン人の生活改善に繋がっていくことでしょう。

皆さんの力を
必要としています

（三月に事務局に寄せられた手紙）

ジア・ウル・ラフマン
ヌール・ザマーン

敬愛するペシャワール会の皆様へ
アフガン人は大変に貧しく、日本の皆様か

らの更なる支援を必要としています。アフガンの現状は確かに良好とは言えませんが、皆さんが思っているほど悪いわけではありません。それぞれの目的があつてアフガニスタンに攻撃している人々がアフガン情勢を混乱させているのです。

この三〇年間、アフガニスタンが深刻な事態に直面し続けていることは、我々よりもむしろ皆さんの方が良くご存知だと思います。旧ソ連によるアフガン侵攻が終結したかと思うと大干ばつに見舞われ、それに追い討ちを

また、モスク建設はアフガン国民がもっとも敬意を抱く事業で、今回のモスク建設には住民も心から喜んでいます。同建設は二〇〇七年一二月に開始され、現在も進行中です。

ご寄付を下さった親愛なる日本の支援者の皆様が我々にお心を寄せ、ご協力くださっていることは私達をとっても幸せな気持ちにしています。皆様のご支援に心から感謝申し上げます。どうぞ我々への支援を断つことのないよう、何度でも何度でも繰り返しお願い致します。我々には子供があり、家族があり、彼らを食わせなければなりません。もし皆様からの支援が途絶えたら、家族を失うことさえあるかも知れません。更なるご支援を今後ともよろしくお願い致します。

*アフガニスタンの殆どの人々はアフガニスタンと日本の独立日が同じと思っている。

かけるように米軍による残虐な攻撃が現在も続いています。米国がアフガニスタンの文化伝統の基本である宗教をはじめこの国の全てを破壊する意図を以って攻撃していることは、世界中の誰の目にも明らかです。そのような中、唯一ずつと我々のそばに寄り添い、誠意をもってアフガン国民を助けようとして下さっている日本の皆さんこそ、我々の兄弟姉妹の様な存在です。破壊と深刻な旱魃からアフガン人を守るため、今こそ皆さんのような方々からの真心のこもった支援が求められて

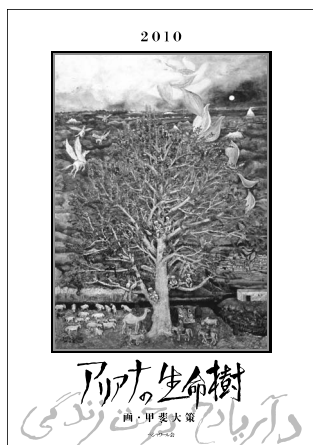
2010年カレンダー

「アリアナの生命樹」

画・甲斐大策

予約受付開始します

A2判(画・8点) 定価:1500円(税、送料込み)



今年もカレンダーの予約が始まります。2010年カレンダーのテーマは「生命樹」。世界各地で太古から図像化されてきた「生命樹」には、希望や豊穡、そして永遠の生命への願いが込められているといわれ、現地においてもチャイハナの壁画などに多く描かれているそうです。

画は会報表紙画をご提供いただいている甲斐大策さん。いずれの絵にも印象的な「生命樹」と、その樹影に抱かれるように生きる人々の姿が甲斐さん独特のタッチで描かれています。

同封のハガキでふるってご予約ください(ご友人、知人へのプレゼントも承ります)。

いるのです。

現在ニングラハル州の情勢は大変に平和で、数多くの外国人もここで働いています。

アフガン国民一人ひとりが、ペシャワール会の皆さんが我々に与えて下さっている類の支援を求めています。アフガン人は皆様に心から深く感謝しています。もし皆様との繋がりがなくなってしまうと、多くのアフガン人が間違いなく命を、そして家族を失うことになるでしょう。ですからどうぞ、アフガンの人々への支援を継続してください。多くのNGOがアフガン国内で活動していますが、彼らはアフガン人のためではなく、自分たちの

目的の為に活動しています。一方、PMSはアフガン人の目に嘘偽りのない真の支援の姿と映っています。これまでにアフガニスタンを訪れた日本人の方々に聞いてみてください。彼らはアフガニスタンの現状と苦悩をよくご存知です。

我々の活動現場も事務所もきちんと運営されています。それでも事務所においても、また現場の管理においても日本人ワーカーの方々の存在が必要になっていきます。もし彼らがアフガニスタンに来てくださるのなら、我々の息子たちを差し出すことをお約束しましょう。市内の治安は全く問題ありません。アフガン

国民は本当に皆さんのお力を必要としているのです。事務所のコンピュータやインターネットのウィルス対策、その他コンピュータシステムについても皆さんに助けて頂きたいのです。自分たちだけでは難しく、ここしばらくシステムのインストールなどでも問題に直面しているのが実情です。

最後まで読んでくださって有難うございました。下手な英語で申し訳ありません。

(注記)この手紙は日本人ワーカーが全員引き揚げた後、追いつめられた気持ちになっていた頃のもので、その後ワーカーが短期間現地に行き、作業を共にしました。現在、治安はこの頃より悪くなっています。

●事務局便り

*八月二十三日(日)、伊藤和也君の一周忌が、静岡県掛川市で行われた。伊藤君のお墓のある興禅寺で行われた法要には、伊藤君のご両親と妹弟と、親戚の方にアフガン大使ご夫妻と外務省関係者が参列され、会からは、伊藤君とともにアフガニスタンで働いたワーカーOB、事務局員とともに、帰国したばかりの中村医師も参列した。墓参りのあと、場所を変えて食事が行われ、伊藤君を偲びつつしばし歓談の時を過ごした。ご両親からは、いまだに伊藤君の死を受け入れられない胸の内が伝えられ、中村医師からは、この一年伊藤君のことを思い事業に励んだことが語られた。この一年経験したことのない辛い日々だったが、それが伊藤君への思いを新たに帰途についた。

*今年のノーベル平和賞は、米国のオバマ大統領に与えられた。受賞理由は、『核なき社会』を目指すとする理念と取り組みを重視し、「人々により良き未来への希望を与えた」ということだという。「まだ彼は何も成し遂げていない」という声もあるようだが、受賞は概ね好意的に受け取られているようである。しかし私たちアフガニスタン復興に関わってきたものから見ると、何とも理解不能な「平和賞」としか思えない。アフガニスタンやイラクの民衆の立場に立てば、なおさらであろう。オバマ大統領は、「アメリカのイラク戦争は間違っていた」と明言した。だが、米軍の犠牲になった夥しい数のイラク民衆に謝罪したとは聞いていない。また「主戦場はアフガニスタン」だと米軍増

派を企図し、いまだにアフガン民衆の上に爆弾を落とし続けている。核兵器も使用していないが、通常兵器によって夥しい数の民衆を殺し続けている国の大統領であることは否定できない。そういう人物にノーベル平和賞を与えられた。この受賞を機に、オバマ大統領が一切の軍事活動を停止することがあるだろうか。そうでないとしたら、私たちは「ノーベル平和賞」というものが、その程度のものだと思わざるを得ない。

◎村から

全長二四キロメートルのマルワリード(真珠)用水路が六年半の歳月を経て完成し、留守を預かる私たち事務局ボランティアは歓声をあげて喜びあいました。ペシャワール会の二六六年間に及ぶ活動がこの度DVD「アフガンに命の水を」として発売されましたが、中村医師と日本人ワーカー、そしてアフガン農民たちが心を一つにして、無謀とも思える困難な事業に立ち向かい、不毛の土地を次々に緑の大地へと変えていく過程を喜びあう姿がとても感動的です。伊藤和也さんの写真集「ダラエヌールの子供たち」も出版されました。水遊びを楽しむ子供たち、麦畑や菜の花畑で戯れる、笑顔がはちきれそうな幸せな子供たちであふれています。アフガンの地では、今も、この平和と隣り合わせに武力攻撃が続けられています。新しい政府が、アフガンの人々に真の平和と幸福をもたらすような復興支援をしてくれることを、心から願っています。(Y・S)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む

中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 【3刷】1890円

丸腰のボランティア

すべて現場から学んだ

中村哲編 【2刷】1890円

空爆と「復興」

【2刷】1890円

辺境で診る

辺境から見る 【3刷】1890円

ダラエヌールへの道

【3刷】2100円

医者 井戸を掘る

【10刷】1890円

医は国境を越えて

【6刷】2100円

ペシャワールにて

【8刷】1890円

アフガニスタンの

大地とともに 【2刷】

伊藤和也 遺稿・追悼文集

アフガニスタンの復興を、その深きところで願った伊藤ワーカーの遺した足跡

A5判並製260頁 カラー90頁 1575円

聖愚者 甲斐大策

の物語 1890円



石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24

電話092(714)4838

価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAH HOUSE (千八二〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇一五 上村第二ビル六〇三号) 〇九二七三二一(三三七二)内におく。